

# 焦点と参照点構造

松 中 義 大

基礎教育課程

## Focus and Reference-Point Construction

MATSUNAKA Yoshihiro

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received October 12, 1999 ; Accepted January 14, 2000)

### 1. はじめに

きわめて卑近な例であるが、朝日新聞本年9月5日付朝刊社会面に(1)に示すような日本語があった。

(1) この人が読みたい

この1文だけ見ると、2つの解釈が日本語として可能である。第1に、主語である「この人」が言語上で明示されていないあるものを読むことを欲しているという解釈で、「この人」が「読む」の主語になっている。第2に、読者ないしは記者が「この人」がどうしているのかを読んでみたいという解釈である。つまり「この人」は「読む」の目的語として解釈することができる。このことは、この2番目の解釈でならば、(2)のように「が」を「を」に変えても日本語として通用することからもわかる。

(2) この人を読みたい

実際の紙面ではこの後者の解釈が用いられており、他の人物ではなく「この人」の考えを聞いてみたい、という意味合いである。このように、助詞「が」は、単に文の主語を明示する役割だけでなく、文のある要素に「焦点」を付与する機能を持っているとすることができる。ここで言う「焦点」とは、文中のある要素が他に比べて情報量が多いなどの「際立ち」のことを指す。本稿では本来ならば動詞の目的語として解釈され、「を」格が与えられる名詞に焦点が置かれて「が」格が与えられる現象(ここでは便宜上「を-が交替」と名付ける)を、認知言語学の視点から、特にその中心的な主張の一つである「参照点構造」を視野に入れて論じてみることにする。第2

節ではこの言語現象を細かく見ることにし、第3節ではその背景にあるものを認知言語学の視点から説明してみたい。

### 2. 「を」と「が」の交替

日本語の助詞「が」に関しては、助詞「は」との関連で古くから議論の対象となっているものである。前節でも触れたように、「が」は一般的に文主語の名詞に付与されると考えられるが、以下の例文のように、「が」が付与された名詞が文の焦点になっていると考えられる。

(3) a. 誰が転んだの?

b. 太郎が転んだよ。

#太郎は転んだよ。

(4) a. 何があったの?

b. 太郎が転んだんだって。

#太郎は転んだんだって。

(5) a. 太郎に何があったの?

b. 太郎は転んだんだって。

#太郎が転んだんだって。

(3)から(5)の会話のそれぞれa.のような疑問文に対して、助詞「が」と「は」の違いで、与えられた文脈における応答の文(それぞれのbの文)の容認度に差が生じる。(3)では、「転んだ」人間が誰であるかが尋ねられており、その答えとなるべき部分に当然焦点が当てられ、(3b)では「は」よりも「が」の方が容認度が高い。また、興味深いことに、動作全体が焦点となるような(4a)のような質問文の場合でも、助詞は「が」が用いられる。他方、動作のみに焦点が当たる(5a)の場合には、主

語は焦点として解釈されず、助詞は「は」が用いられている。このような「が」のもつ焦点の機能に関しては、久野 (1973)<sup>2)</sup>以後様々な研究が進められてきた。また、文脈の中での情報量を考えなくても、以下の文の用法のように「が」のもつ「排他」の意味合いは注目を集めてきた。

(6) 中野より新宿の方がたくさん店がある。

「たくさん店がある」場所として、話者は「中野」が排除し、「新宿」を選択するという意味合いを読み取ることが出来る。

本稿で問題となっている(1)の例文の「が」も同じように解釈することができる。つまり、「この人」に焦点が当たり(他の誰でもない「この人」)、助詞「が」が付与された。言い換えれば本来の目的格の助詞「を」から「が」に交替が起きたと言えよう。こうした他の助詞から焦点(あるいは「排他」)の助詞「が」への交替は「を」以外にも見ることが出来る。(6)では、本来は存在の場所を表す助詞「に」(「新宿の方にたくさん店がある」)からの交替である。

- (7) a. 渋谷のクラブが若者がよく来る。  
(渋谷のクラブに若者がよく来る。)
- b. この店がキャッシュカードで買い物が出る。  
(この店でキャッシュカードで買い物が出る。)
- c. 太郎は花子が一番苦労させられた。  
(太郎は花子に一番苦労させられた。)

(7a)は「来る」という移動の到着点を表す助詞「に」から、(7b)は場所を表す助詞「で」から、(7c)は受動文の動作主を表す助詞「に」から、それぞれ「が」への交替が起きている<sup>3)</sup>。本稿で検討している(1)の例文も同様に考えて、動詞の目的語を表す助詞「を」から「が」への交替と考えることが出来る。

- (8) a. タバコが吸いたい  
b. ケーキが食べたい  
c. 食事がしたい

(8)はそれぞれ話者(「私は」が省略されている)の願望を表すものと解釈することができる。また、(1)のように、「が」を「を」に交替させても意味をとることができる点も共通している(「タバコを吸いたい」など)。こ

れまでの議論に基づけば、(8)ではそれぞれ「タバコ」、「ケーキ」、「食事」に焦点が付与されていると考えられるわけだが、ここで注目しなければならないのは、この「が」による焦点付与が、願望を表す動詞語尾「～たい」と共起しなければ文が非文になるという点である。

- (9) a. \*タバコが吸う  
b. \*ケーキが食べる  
c. \*食事がする

(9)のようにそれぞれの動詞の語尾から「～たい」を除いてしまうと、「が」は出現することができず、それぞれの名詞は「を」を付与しなければならなくなる。このことから、この構文型では「が」による焦点付与と、「～たい」による話者の願望を表す表現とが関連しあっていると言えるだろう。この点に関しては、中右(1994)において以下のような焦点付与のシステムの図式で捉えられている。

- (10) Sモダリティは、それが作用域とする全体命題PROP<sup>4)</sup>内の要素を焦点部位とする。ただし、その要素は語彙論的、統語論的、韻律論的、語用論的条件を同時に満たしていなければならない<sup>4)</sup>。

中右は、発話される文の意味構造を大きく「モダリティ」と、「命題内容」とに分け、階層をなしていると主張する。「モダリティ」とは発話時における話者の心的態度と定義され、「命題内容」は話者の態度とは独立した客観的意味成分である。本稿で議論している構文型に当てはめるとすれば、モダリティは話者の「願望」という心的態度(動詞語尾「～たい」で表される)であり、命題内容は「タバコを吸う」、「ケーキを食べる」、「食事をする」などといったものとなる。このことから、命題内容は焦点となることが出来るが、モダリティを表す要素は焦点となることが出来ないと言ったことが出来る。

- (11) a. Honestly, John called me yesterday.  
b. \*It is honestly that John called me yesterday.

(11)の‘honestly’は話者の心的態度を表すモダリティ表現の一種であり、「ジョンが私に昨日電話をした」という事実を聞き手に陳述する際の態度を表している。そのため、英語で構造的に焦点をあらわすことの出来るIt分裂文では、焦点と解釈されるbe動詞の後ろの位置にモ

ダリティ表現である 'honestly' を置くことは出来ない。また置いたとしてもその場合の副詞 'honestly' は話者の心的態度とは解釈されずに、「ジョンが昨日私に電話した」時のジョンの態度としてしか解釈されず、その場合は 'honestly' はモダリティ表現とはならない。

このように、(8)の構文型では、願望のモダリティが表明されていることから命題内容の要素に焦点を付与することが可能となっている<sup>9)</sup>。

しかしながら、願望の動詞語尾「～たい」が付いていればいかなる名詞でも「が」によって焦点が付与されると言うわけではなく、ある種の制約が存在する。

- (12) a. \*タバコが捨てたい  
b. \*食事がやめたい

(12)では、動詞に「～たい」が付加されているにも関わらず文は奇異に感じられ、「が」による焦点の取り立てをしない無標の構文の方が許容度が高い。

- (13) a. タバコを捨てたい  
b. 食事をやめたい

このようなことから、拙稿 (松中 (1999))<sup>10)</sup>で願望の「～たい」について以下のような規則を提示した。

- (14) 「～たい」によって表される願望のモダリティ (あるいはその反対の「～たくない」) は命題内容の「動作」を焦点として取り立てる。

すなわち、動詞の目的語の名詞が「が」によって取り立てられている場合でも、焦点は動作それ自体にあり、無条件にどのような名詞でも焦点化されるわけではなく、動詞との関連性が焦点化の要件となっている。

- (15) a. 寝る前に歯磨きがしたい  
b. 今日は気分がいいので食事がしたい  
c. お酒が飲みたい

(15a)は「が」で焦点化された名詞自体が本来動作を含む例で、「歯磨き」は「歯を磨く」という動作が含まれている。このため、「が」による焦点化が可能になっている。この類の例としては「後かたづけ」、「種まき」、「稲刈り」などが挙げられる。また、名詞自体に(15a)のように動作を含まない場合でも、ある特定の動作と関連性が類推できる場合には「が」による取り立てが可能となる。このパターンは2つの種類が考えられ、第1は名詞自体が

「～する」を付けることで動詞化するもので、(15b)がこれに当たる。「食事」は「～する」を付けることで「食事する」という動詞になる。第2は、名詞に(15a)のように動作自体を含まず、さらに(15b)のように「～する」を付けて動詞化することのできない名詞でも、その名詞から類推できる動作がかなり特定できるものは、その名詞を「が」で焦点化することができる。(15c)がそれにあたり、「お酒」は「飲む」という動作との結びつきが経験上最も妥当なものと言えるだろう。(8a, b)で示した例もこれに当たる。

- (8) a. タバコが吸いたい  
b. ケーキが食べたい

「タバコ」、「ケーキ」はそれぞれ「吸う」、「食べる」という動作の連想が容易である。逆に、連想されにくい動作の場合、(12a, b)で見たように許容度が低くなる。

- (12) a. \*タバコが捨てたい  
b. \*食事がやめたい

これらの場合でも、例えば「捨てる」という動作との連想が容易な名詞であれば、「が」によって焦点化され得る。

- (16) 吸いながら捨てたい

本節では、動詞に願望を表す語尾「～たい」が付いた場合における動詞の目的語の焦点化の現象を見たわけであるが、通常「を」格で表される目的語が「が」によって焦点化されるためには、その目的語の名詞が以下の範疇のうちのどれかに属していなければならない。

- (17) a. 「動作」の意味を包含する名詞、あるいは名詞化した動詞  
例：歯磨き、後片付け、種蒔き、稲刈り、など  
b. 「動作」自体は含まないものの、「～する」を付けることで動詞化できる名詞  
例：食事、散歩、読書、など  
c. ある特定の「動作」の連想が容易な名詞  
例：酒 (飲む)、タバコ (吸う)、ケーキ (食べる)、本 (読む)、など

ただし、(17c)の「特定」というのは、名詞と動詞の組合せが1通りであるという所まで限定はしない。

## (18) ケーキが作りたい

いずれにせよ、「～たい」を伴う構文では、「が」によって焦点化されるのは名詞であっても、その名詞には「動作」が含意されていなければならないことがわかる。本節では、「～たい」の構文における名詞の焦点としての取り立ての現象を見てきた。次節ではなぜこのような現象が発生するのかを、認知言語学の視点から見てみることにする。

## 3. 参照点構造

認知言語学とは、言語能力を人間の認知機構との関連で説明しようというものである。すなわち、人間は知覚を通して外界を把握するわけであるが、それは外界の存在を切り取って脳内に客観的に写し取るというのではなく、そこには主観的な解釈が関わっていると考える。そして、言語として表されている表現は客観的に存在する外界そのものではなく、そこには主観的な解釈が介在していて、その解釈によって複数存在する「外界の切り取り方」の中から一つを選び出しただけに過ぎないというのが認知言語学の基本姿勢である。例えば、次の2つの文では、外界の客観的状況は同じであるのに、言語表現は話者の主観的知覚を反映して異なる「切り取り方」をしていると考えられる。

- (19) a. The lamp is above the table.  
b. The table is below the lamp.

2つの文とも、'lamp' と 'table' との位置関係を述べているわけだが、それぞれの存在物のいずれかにより多くの「スポットライト」を当てるかによって非対称性が生じる。言語表現ではそれが、片方が主語として文頭の位置に現れるのにたいして、もう片方は前置詞句内に生じるといった違いになる。この考え方は、ゲシュタルト心理学の図 (figure) と地 (ground) の関係とも関係するもので、言語を知覚との関連で分析しようとするものである<sup>7)</sup>。

さて、本稿で問題となっている構文型に認知言語学的な分析を試みるとするならば、どのようなものが考えられるであろうか。この構文では、話者の「願望」という極めて主観的な事柄が言語化されているので、言語解釈の主観性を主張する認知言語学において適切に説明されなければならない現象であろう。

ここではその説明の道具立てとして「参照点」という一般的な認知モデルを取り上げてみることにする。「参照点」とは文字どおり対象となるある事物を指示する際の

参照となる点である。例えば、交番でAという地点への道順を聞いたとすると、「この先の〇〇銀行の角を左に曲がって公園の先を右に曲がったところ」というような言い方をするが、この場合に「銀行」、「公園」といういわば「目印」を用いることで説明を容易にすることが出来る。もし、そうした目印を使わずに説明しようとする「この道を350メートル歩いたら左に曲がりその先100メートル行ったところで右に曲がる」というような言い方をしなければならず、説明するのが大変難しくなる。この「目印」がまさしく「参照点」であり、事象の中から認知的に際立ったある事物を選び出す能力を人間が持っていると考えられるわけである。

参照点 (目印) と指示 (Aという地点) との関係は図1のように表される<sup>8)</sup>。

C (Conceptualizer) は概念化者 (話者ないし聴者)、R (Reference point) は参照点、T (Target) は指示されるものを指す。楕円 D (Dominion) は参照点によって指示可能な領域を示し、C から R 経由で T へと至る点線の矢印は概念化者が T に対して注意や意識を向けている (メンタルコンタクト mental contact と呼ぶ) 状態を示している。こうした関係を「参照点構造」と呼ぶことにする。この図式で参照点を考えると、参照点は2つの条件を満たさなくてはならないことがわかる。第1に C と T を直接結ぶメンタルコンタクトよりもわざわざ R を経由するだけの理由がなくてはならず、参照点は経由するに充分な際立つ存在でなくてはならないということである。上記の例でいえば、「銀行」「公園」は話者・聴者の視野の中で目立った存在でなければ目印として機能しない。例えば、道端に落ちている小石などではその役目は果たせない。第2に T が参照点で指示可能な領域 (楕円 D) の内になくなくてはならないということである。これは、A という地点を説明するのに全く無関係な目印 (例えば全く逆方向にある郵便局) を示しても適切な説明ができないことでもわかる。

この参照点構造は人間の一般的認知能力の一つと考えるわけだが、認知言語学はこうした認知能力が言語現象にも反映されると主張するので、この原理を用いて様々な言語現象を説明しようとして試みている。そのなかで最も

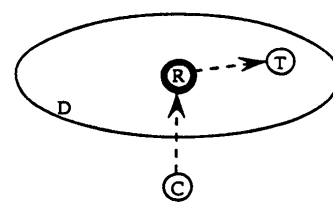


図1

基本的かつ顕著な例がメトニミー表現と言える。

- (20) a. John bought Shakespeare.  
b. Mary drank a glass dry.

(20a)では著者名の Shakespeare を参照点としてその著作物をターゲットとしている。また、(20b)では容器を参照点としてその内容物（ここでは飲み物）を指し示していて、明示されている名詞の意味の拡張、ないしは多義性の方向性を決める一つの要因となっている。

更に一般的な以下のような例も参照点構造による意味の拡張を見ることが出来る。

- (21) a. John heard a piano.  
b. an arrow in the tree.

(21a)で聴いているのはピアノそのものではなく、ピアノが出す「音」である。また、(21b)では、木の中に矢のすべてが埋没しているという解釈よりも、木に刺さっている矢、すなわち矢の一部が木の中にあるという解釈の方が自然である。であるから、それぞれの名詞「ピアノ」、「矢」は参照点であって、実際のターゲットはそれぞれ「ピアノの音」でありまた「矢の木に刺さっている部分」である。

以上見た例では、すべて名詞の意味拡張の説明として参照点構造がかなりの妥当性を持つことを見てきたわけだが、同じようなことは構文の意味解釈にも当てはめて考えることが出来る。Langacker (1995)では英語のいわゆる「繰り上げ構文」の分析を参照点構造を用いて行った<sup>9)</sup>。

- (22) a. We expected that Don will leave.  
b. We expected Don to leave.  
(23) a. That Don will leave is likely.  
b. Don is likely to leave.  
(24) a. To like Don is easy.  
b. Don is easy to like.

(22)から(24)の a の文が非繰り上げ構文、b が繰り上げ構文である。(22)は補文の主語から主節目的語への繰り上げ、(23)は補文主語から主節主語への繰り上げ、(24)は補文目的語から主節主語への繰り上げを示している。現代言語学の一つの主要な学派である生成文法では、それぞれの a の非繰り上げ構文と b の繰り上げ構文は意味が同じであり、前者から後者を「変形」という操作で派生させていると主張されている。

他方、認知言語学では言語現象は人間の一般認知能力を反映するという立場に立つので、異なる言語表現は異なる認知を反映していると考える。それゆえ、(22)から(24)のような非繰り上げ構文と繰り上げ構文の間には異なった認知を反映した意味の違いがあると主張している。ここではその分析の詳細にまでは触れ得ないが、概略を述べると、上記の例の動詞 expect、形容詞 likely、easy はそれぞれの a の例文が示すように「事態」全体を補部あるいは主部として要求するのが基本的用法である。このことは、(25)のように繰り上げられた名詞 Don だけを残して残りを省略してしまうと非文になることでもわかる。

- (25) a. \*We expected Don.  
b. \*Don is likely.  
c. \*Don is easy.

(22b)では Don のみを目的語として取り立てているが expect しているのは「Don が去る」という事態全体である。また、(23b)でも蓋然性の尺度で測っているのは「Don が去る」という事態全体であるし、同様に(24b)でも難易度の尺度上にあるのは「Don を好きになる」という事態である。どの場合でも、選択された事態の中からその事態にたいする参与者である Don のみを更に際立たせるという状況になっているわけである。言い換えれば、Don を「参照点」として際立たせ、その参照点が参与者として関わっている事態をターゲットとして指示していることになる。

では「事態」全体をターゲットとする非繰り上げ構文と、「事態」の中からその参与者を「参照点」としてさらに際立たせる繰り上げ構文の間ではどのような意味の違いがあるのだろうか。(22)の例を見てみると、両方とも未来の可能性について述べているわけだが、非繰り上げ構文の(22a)では助動詞の will を用いることによって、これまでの現実（過去）から予測された未来（projected reality）の中に「Don が去る」という事態を投影する可能性が高いのに対し、(22b)の繰り上げ構文では参与者である Don という人間が更に際立ち、また不定詞を用いることによって助動詞 will の持つような性質が反映されないため、これまでの現実とは無関係に将来の可能性を推測する文となる<sup>10)</sup>。また、以下の(26)では、繰り上げ構文では、参与者である人間に際立ちが与えられるのに付随して、その人間の持つ意志性にも際立ちが与えられる。そのため、その意志を説明する理由節との共起が非繰り上げ構文と比べてより自然となる。

- (26) a. Bill is certain to get the job, because he pursued it so aggressively.  
b. ?That Bill will get the job is certain, because he pursued it so aggressively.<sup>11)</sup>

このように、繰り上げ構文の説明として参照点構造はとても有効であると考えられ、非繰り上げ構文との間の意味の差異を説明する一つの方策となっている。

さて、本稿で議論の対象となっている構文「タバコが吸いたい」も同じように参照点構造を用いてその特徴を説明できるのではないだろうか。前節で見たように、この構文では助詞「が」によって取り立てられている動詞の目的語が、任意に選択できるわけではなく、その構文で表現される動作と関連を持たなければならない。そして、(14)のような制約として提示した。

- (14) 「～たい」によって表される願望のモダリティ（あるいはその反対の「～たくない」）は命題内容の「動作」を焦点として取り立てる。

また、「が」が付与できる名詞の種類として(17)のように分類した。

- (17) a. 「動作」の意味を包含する名詞、あるいは名詞化した動詞  
例：歯磨き、後片付け、種蒔き、稲刈り、など  
b. 「動作」自体は含まないものの、「～する」を付けることで動詞化できる名詞  
例：食事、散歩、読書、など  
c. ある特定の「動作」の連想が容易な名詞  
例：酒（飲む）、タバコ（吸う）、ケーキ（食べる）、本（読む）、など

参照点構造を構文の解釈に当てはめるとき、繰り上げ構文の例で見たように、「事態」全体の中からある際立った要素を参照点とする。つまり、願望のモダリティが焦点として取り立てている「動作」から、さらにその動作に関わる名詞を参照点として取り立てていると言うことが出来るのではないだろうか。(17a)、(17b)では動作自体が名詞化されて「が」が付与されているので、参照点構造にはなっていないが、(17c)では、「酒」、「タバコ」、「ケーキ」、「本」といった名詞が参照点となって、動作がターゲットとして指示されていると考えられる。(12)が非文になるのは参照点から指示可能な領域（図1の楕円D）の中にターゲットが存在していないことに基づく。

- (12) a. \*タバコが捨てたい  
b. \*食事がやめたい

これらの文が「が」による取り立てのない無標の構文（「タバコを吸いたい」）の場合には、(14)の制約によって「動作」に焦点が当たるわけなので、「捨てる」という行為に焦点が当てられる。

- (27) a. そのタバコどうしたいの？  
b. このタバコを捨てたいんだ。  
c. #このタバコが捨てたいんだ。

(27a)のような疑問文にたいする応答として(27b)、(27c)を比べると、相対的に(27b)のほうが容認度が高い。これは、疑問文でどういう「動作」を願望しているのかを問うているため、自然に「動作」に焦点が当たる(27b)がより適切であり、他方(27c)は「が」によってマークされている「タバコ」という名詞がより際立ってしまうため少し奇異な感じになってしまうと考えられる。

また、(18)で名詞から連想される動作は特定されるにせよ1対1の対応ではないことを見た。

- (18) ケーキが作りたい。  
(6) b ケーキが食べたい。

「ケーキ」によって想起される動作は「作る」のみではなく「食べる」でもよいことは(8b)が(18)と同様に適切な文であることでもわかる。これは、「ケーキ」という参照点が指示可能な領域に「動作」が2個以上含まれていて、それらにメンタルコンタクトを結ぶことが等しく可能であることを示していると言えるだろう。ここで注意しておきたいのは、このメンタルコンタクトや参照点で指示可能な領域は、静的で常に一定のものであるわけではなく、我々の外界の認知を反映してダイナミックに変動するものであるということである。例えば、通常「酒」という名詞を参照点として願望を表すとすると、その指示可能な領域にある動作は「飲む」であり、「酒が飲みたい」という文が生成されるが、もし仮に、造り酒屋の文脈で考える（言い換えれば、そういう外界の情景を実際に知覚したり、あるいは想定する）と、「今年はいいい米が手に入ったから、誰もがうまいという酒が作ってみたい」というように「酒」を参照点として「作る」という動作をターゲットとすることが可能になる。

#### 4. おわりに

本稿では、日本語において動詞に「～たい」を付加し

て願望を表現しようとする時の助詞「が」による焦点化を見てきたが、助詞「を」と「が」の交替は任意に起きるのではなくて、我々が外界を主観的に解釈する際に、認知的に際立つものを「参照点」として取り立てるといふ認知能力が言語に反映されているということの一つの例であると言ふことが出来るだろう。しかしながら、焦点化の方法は多種多様であり、言語間の違いも大きいので、焦点に関するすべての現象を参照点構造で説明することが可能であるというわけではないだろう。そうした面ではさらに研究を発展させていく余地は大いに残されている。ただ、「焦点」という現象は、言語表現の中で他の要素よりも際立たせることで意志疎通を容易にする、言い換えれば聞き手に知覚、認知されやすくするための重要な方策であり、言語と知覚との関連性を探求する認知言語学は今後この分野に大いに貢献すると思われる。

## 註

- 1) 例文の文法性（容認度）の判断は文頭の印で表す。\*は文法的に適切でない非文、#は語用論的に文脈上不自然な文を表し、?は文法性の判断に「ゆれ」（個人差）があるものを示す。
- 2) 久野すすむ、『日本文法研究』（東京：大修館書店、1973）。
- 3) 詳しい議論は、野田尚史、『「は」と「が」』（東京：くろしお出版、1996）、23章、24章を参照。
- 4) 中右 実、『認知意味論の原理』（東京：大修館書店、1994）、p. 152.
- 5) 本稿では触れないが他のモダリティでも可能な場合がある。一例を挙げると、「英語が話せる」のような可能を表すモダリティである。  
また、焦点を表す助詞「が」が意味の階層のうちどの階層と結びつくものであるのかについては、本稿では中右理論に基づいてSモダリティを表すものであるとしたが、未だに説が定まっていない。この点に関しての比較検討は将来の研究課題である。
- 6) Yoshihiro Matsunaka, “Sentence Modality and Focus Marker ‘ga’”, 『ICU 英語研究』 第8号、1999、pp. 19-30.
- 7) 詳しくは、川上誓作編著、『認知言語学の基礎』（東京：研究社出版、1996）を参照。
- 8) 以下の議論は Ronald W. Langacker, “Reference-Point Constructions”, *Cognitive Linguistics* 4 (1993) : 1-38に基づく。
- 9) Ronald W. Langacker, “Raising and Transparency”, *Language* 71 (1995) : 1-62.
- 10) 詳しくは Ronald W. Langacker, *Foundations of Cognitive Grammar vol. 2: Descriptive Application*, (Stanford: Stanford University Press, 1991), pp. 273-81を参照。
- 11) Ronald W. Langacker, “Raising and Transparency”, *Language* 71 (1995), p. 38.